

法城を護る人々

—— 映画文学人生論

原作：松岡譲 (1926-34) 「第一書房」
参考：憂鬱な愛人(1927-28) 「婦人公論」
敦煌物語 (1942) 「日下部書店」
漱石先生 (1934) 「岩波書店」
漱石の思ひ出 夏目鏡子述 松岡筆録 (1955)
関口安義 評伝 松岡譲 (1991) 「小沢書店」

僕はよく自殺ということを考える

松岡譲の小説『法城を護る人々』は浄土真宗光明寺の跡継をめぐる父と子とのとげとげしい口論ではじまる。

「そんならお前はどうかあっても坊主になって、俺のあとを継ぐ気はないというんだな」。

「そうです。僕はいやです。今日はきっぱり断言します。あの浪花節そっくりのお経の節廻しはちよんがれ然とした説教、死人の番人、心にもない偶像の崇拜、乞食同様の生活法。すべていやです。下には壇中にペコペコ頭を下げ、上には本山に頭を押さえつけられて、本心でもないことを言って廻らなければなりません。そんな生活をして一生終わる気は毛頭ありません」。

息子は東京の帝大で哲学を学んでいる。作者自身がモデルだとすれば、東京帝国大学文学部哲学科に在学中、芥川龍之介、菊池寛、久米正雄、成瀬正一とともに第四次新思潮に参加し、夏目漱石の門人となった作家の卵だ。

文学青年らしい日記体の記録もみうけられる。

X月X日

僕はよく自殺ということを考える。生きて長い重荷に押しつぶされるより、いつそひと思いに死んだほうがさっぱりしていいような気さえする。五月はいつも自殺を思う日だ。僕はこの



法城を護る人々

映画文学人生論

月に死ぬような気がする。ただし人を愛することもなく人に愛せられることもなく、死ぬことは堪らなく淋しい。――

これを読むと、まるで漱石の小説『こころ』に登場するKの日記のように思えてくる。Kも浄土真宗の坊さんの息子だ。

しかし、Kが実家からも養家からも勘当された苦学生だったのに対して、『法城を護る人々』の宮城は父親と対立しても勘当はされていない。

彼は実家から学資を送ってもらっている。その学資は主として檀家からの布施によるものだ。宮城はそれを恥じていた。光明寺の跡を継ぎたくないのもそのためだ。そんなのは幸福な悩みだよという友人の大槻に対して彼は反論する。「なるほど、人は何によって生きるか。人はいかにして生きるか。この二つをすべてパンの問題として考えている君の張りつめた気持から言えばあるいはそうかも知れん。しかし僕からいえば君はまだ本当に僕の煩悶を理解していないようだ」。

最後に光明寺が火事で焼失し、宮城は寺院と訣別する。祖師に還り、祖師を超越せよ、と主張して、初志を貫かぬこうとした彼の行動は空振りに終わった。法城の巨大な組織はビクともしない。ただし、父は最後に彼の行動を理解して死んだ。

よもすがら仏の道を求むれば

我が心にぞたずね入りぬる 一休宗純